

高齢者の身体表現性障害

繁田 雅 弘（首都大学東京健康福祉学部作業療法学科）

はじめに

高齢者における身体表現性障害などの神経症圏障害を対象とした治療試験や介入研究は少ない。症状から見た予後も良いものではない。専門医であっても改善に導くことは必ずしも容易ではないと思われる。一定の医師患者関係を築くことができずドクターショッピングを繰り返している患者も多い。一般的な治療としては、支持的療法と指示的療法を患者の症状と治療者のバランスで組み合わせながら、SSRIや時に抗不安薬などの併用を行うものと思われるが、そうした治療だけでは目立った改善をみることは稀で、認知行動療法についても高齢者の場合は積極的に行われているという話もあまり耳にしない。

しかし、中には症状に対する心的態度を修正できたり、部分的にはあれ症状を受容し、治療的に進展をみる人もいる。性格傾向や教育程度をふまえて病識・病感に注意を払いつつ、適切なタイミングでの精神療法的介入や生活指導が成功すれば、状態が改善することを日常診療で時として経験する。そこで今回は、従来指摘されてきた治療の考え方に基づいて、演者が日々試行錯誤してきた臨床経験を示して先生方の参考に供したい。なお、身体表現性障害と不安性障害は、明確に区別できないことも多く、不安性障害の治療が身体表現性障害の治療に役立つことも多いと考えられるため、不安性障害の治療や先達の治療経験も交えて紹介したい。

精神療法：外来診療における小精神療法を想定して

演者は治療目標を次のように設定することが多い。すなわち症状の半分くらいは軽減を目指しつつ、残りの半分は受容して（諦めて）もらうことを目指している。そして、固定していた症状が変動し始めれば、改善しているように見えなくても、それは快方に向かうサインだと患者に説明している。その一方で、症状が一過性に改善したように感じられても「また強くなるので、一喜一憂しないように。しかしいずれは全体として快方に向かう」と繰り返し説明している。その他、留意している点について述べたい。

参考文献

- 1) 笠原洋勇：高齢者の精神療法。（日本老年精神医学会編）改訂・老年精神医学講座 総論，ワールドプランニング，東京（2009）。
- 2) 品川俊一郎，繁田雅弘：高齢者の不安障害。（日本老年精神医学会編）改訂・老年精神医学講座 各論，ワールドプランニング，東京（2009）。
- 3) 越野好文：高齢者の身体表現性障害。（日本老年精神医学会編）改訂・老年精神医学講座 各論，ワールドプランニング，東京（2009）。
- 4) 特集「超高齢社会における精神病像の新しい側面」．老年精神医学雑誌，22（8）：901-946（2011）。
- 5) 特集「高齢者の身体的心気的訴え」．老年精神医学雑誌，20（2）：137-189（2009）。
- 6) 特集「高齢者の神経症」．老年精神医学雑誌，15（4）：369-422（2004）。
- 7) 特集「身体表現性障害」．日本医師会雑誌，134（2）：157-213（2005）。